様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２７日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０６２９
研究課題名（和文）児童・生徒の内在化・外在化問題行動のリスク要因および保護要因に関する研究
研究課題名（英文）
Risk and protective factor of internalizing and externalizing problem behavior for child
研究代表者
藤生　英行（FUJIU HIDEYUKI）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：４０２５１００３

研究成果の概要（和文）：

１．子どもの内在化・外在化問題行動には共通要因があることを，各測度の因子分析によって明らかにした。
２．うつの教師用評定尺度を開発した。
３．児童・生徒にとってもっとも大きく身近にある内在化・外在化問題行動のリスク要因および保護要因として，本年度は在席する学級でのポジティブな相互作用の程度を取り上げた。クラスメートとのポジティブな相互作用の程度を測定する十分な信頼性（α=.73-.93）と妥当性を備える尺度を作成した。学級でのポジティブな相互作用が，どのようにうつや不安に影響するかを713名の中学１年生生徒を対象として，time１（4月），time2（5月），time3（7月）に上記尺度とともに，Kiss-18,SLST,自尊感情尺度，DSRS，STAI-Yを実施し，前のtime測定から後のtime測定結果を重回帰分析で予測した。クラスメートとのポジティブな相互作用を促進させることが，保護要因を高めることが実証された。

研究成果の概要（英文）：
1.　There was a common factor in internalizing and externalizing problem behavior by using factor analysis of each measure.
2.　The teacher's rating scale for depression was developed. This scale had high alpha coefficient (.839). And this scale showed significant moderate positive correlations with DSRS, which supports concurrent validity.
3.　The positive interaction scales for classmates (PISC) of Japanese middle school students were developed. These scales had high alpha coefficient (.735 ~ .933). And these scales showed significant positive correlations with RSES, DSRS and STAI-Y, which supports concurrent validity.
There were 713 7th-grade students in the first survey (Time 1; April), 312 in the second survey (Time 2; May) and 162 in the third survey (Time 3; July). Students completed questionnaires that asked about the Positive Interaction Scale for Classmates (PISC; T1,T2), Kikuchi's Social Skill Test (KiSS-18; T1; Kikuchi, 1998), School Life Support Test (SLST; T1,T2; Sugihara et al., 2002) Japanese version of Rosenberg Self-Esteem Scale (RSES; T1; Rosenberg ,1979), Japanese version of Depression Self Rating Scale (DSRS; T1,T3; Birleson, 1981) and Japanese version of State-Trait Anxiety Inventory form Y (STAI-Y; T1,T3; Spielberger et al., 1983). Two standard multiple regressions were performed between depression (DSRS; T3) and anxiety (STAI-Y; T3) as the dependent variables and PISC (4scales; T1, T2), KiSS-18 (T1), school maladjustment (SLST; T1, T2), family stress (SLST; T1), RSES (T1), DSRS (T1), STAI-Y (T1), separately by gender.　The results showed that having positive interaction between classmates predicted students' future depression and anxiety level.

The subscales of "friend's existence", "comfortable class" and "kindness to others" at Time 1 and Time 2 had significant negative effect on depression and anxiety level at Time 3. It was suggested that positive interaction for classmates is important for students to protective factor of depression and anxiety.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：保護要因，リスク要因，児童・生徒，問題行動

１．研究開始当初の背景

本研究は，外在化および内在化問題行動について，日本における保護要因となる要因を検証し，将来的な予防的な介入に役立てる基盤となる知見を集めることを目的とした。本研究でのオリジナルな視点は，外在化問題行動と内在化問題行動で取り上げられるリスク要因と保護要因が一部重複していることに着目し，因果的にこれらの要因を日本サンプルで検証しようとすることである。

このような研究は，本邦においては皆無である。現在，心理学領域では，予防教育が盛んに行われつつある。しかしながら，それらは海外の既存の予防教育プログラムをそのまま踏襲しており，エビデンスに基づかない実践が横行している状況である。本研究の成果により，どの要因に焦点を当てて，予防教育すれば効果が上がるかの検討のための基礎知見が得られる。

２．研究の目的

目的１　自己評定，教師評定結果を因子分析することにより，内在化問題行動と外在化問題行動に共通要因があるかどうかを明らかにする。

目的２　マルチインフォーマントの重要性からうつの教師用評定尺度を開発し，うつ教師評定と自己評定各尺度との関係を検討することで妥当性を検証する。

目的３　児童・生徒にとってもっとも大きく身近にある内在化・外在化問題行動のリスク要因および保護要因として，在席する学級でのポジティブな相互作用の程度に焦点を当て，３ヶ月の時間経過をふまえた縦断的調査計画を元に因果的に上記の要因が特に内在化問題行動の悪化や軽減に貢献するのかを実証的に検討する。

３．研究の方法

研究１

被験者：A県２つの公立中学校の1～３年生計621名（男子334名，287名）とその担任17名

質問紙

１）反抗挑戦性障害(ODD)に関する教師評定項目群（8項目；4件法）

２）行為障害(CD)に関する教師評定項目群(9 項目，4 件法)
３）注意欠陥多動性障害（ADHD）に関する教師評定項目群
４）非情緒性(CU)に関する教師評定項目群
５）外在化問題行動に関する自己評定測度
６）内在化問題行動に関する自己評定測度
手続き：生徒回答質問紙は 3 回に分け，ホームルームなどの時間を利用してクラス毎に実施した。回答は自由意志に基づく記名式とし，回収後担任によって封をされた。実施要領については，事前に文書で各担任に示した。
研究２
被験者：中学１，２年生計 171 名（男子 96 名，女子 75 名）とその担任６名。
質問紙
１）うつに関する教師評定項目群 DSM-IV-TR の基準について，最近１ヶ月くらいの観察で確認できる事項について８項目を作成した。５件法。
２）成績の教師評定　主要５教科について，担任教員による５段階評定を合計したものを使用した。
３）生徒自己評定尺度　SLST - 学校生活サポートテスト(杉原・藤生・熊谷・山中，2002)から，不登校傾向，引きこもり傾向，いじめ問題，体調不良，注意の問題・衝動性傾向尺度，反社会傾向尺度，家族の問題尺度を参考にした項目を使用した。いずれも 4 件法。
　うつに関しては，Depression Self Rating Inventory (Birleson, 1981)を翻訳したものを使用した。計 18 項目について，3 件法。不安に関しては，State-Trait Anxiety Inventory form Y (Spielberger, Gorsuch, Lushene, Vagg, & Jacobs, 1983：以下，STAI-Y)を翻訳し日本の環境に適合するよう表現を一部修正したものを使用した。いずれも back translation の手続きは取らず，内容的な妥当性を尊重した。4 件法。
手続き：HR などの時間を利用してクラス毎に実施した。研究目的に関して説明をした上で同意が得られたもののみが対象となった。調査結果はカウンセラーの対応にも用いられた。
研究３
　児童・生徒にとってもっとも大きく身近にある内在化・外在化問題行動のリスク要因および保護要因として，本年度は在席する学級でのポジティブな相互作用の程度を取り上げた。
対象者　７１３名の中学校１年生
１）学級でのポジティブな相互作用尺度　１７０名の中学校１年生を対象に，「学校生活が楽しくなるのはどのような友だち関係か」について自由記述の回答をさせ，KJ 法により３９項目が得られた。上記サンプルで調査したところ，α係数は.73-.93 の範囲にあり十分な信頼性が得られた。
２）Kiss-18（菊池，1998 ）
３）SLST（杉原他，2002）
４）自尊感情尺度（Rosenberg,1979）
５）Depression Self Rating Inventory (Birleson, 1981)
６）STAI-Y ((Spielberger, Gorsuch, Lushene, Vagg, & Jacobs, 1983)
手続き　time１（4 月）に１），２），３）４），５），６）を実施し，time2（5 月）に１），３），を実施し，time3（7 月）に５）。６）を実施した。HR などの時間を利用してクラス毎に実施した。研究目的に関して説明をした上で同意が得られたもののみが対象となった。

４．研究成果
研究１

外在化問題行動として‘行為障害傾向’を，内在化問題行動として‘うつ・不安’を取り上げ，本邦での研究の第一歩として中学生における内在化問題行動と外在化問題行動との関係を検討したところ，以下のような知見を得た。

各測度の信頼性が認められたため（藤生他,2006,2007），各測度間の相関を検討した。また，すべての測度を因子分析（主因子）にかけたところ，初期解の第１因子の寄与率は41%であった。両者に共通する点があると考えられる。ちなみに，固有値１以上は３因子あり，バリマックス回転後第１因子は内在化および外在化の一部，第２因子は自己評定の外在化の一部，第３因子は外在化の教師評定であった（回転後３因子までで寄与率57%）。第１因子負荷量が高いことから，外在化問題行動と内在化問題行動との間には共通する要因が存在することが明らかとなった。

研究２

１）うつ教師評定尺度の尺度構成　８項目の項目得点は，1.47-1.89の間にあり得点が低い側に偏っている傾向が見られ，項目の標準偏差は.67-.99の間にあった。因子分析を行ったところ，固有値3.991(説明率49.81%)を示し単因子構造と判断された。α係数を算出したところ，.839と十分な信頼性が得られた。

２）うつ教師評定尺度と各尺度との関係　うつ教師評定尺度と各尺度の関係をみるために相関係数を算出したところ，Table 1のような結果が得られた。

３）自己評定うつ尺度との相関は，.170（p<.05）であり，弱い相関であった。しかしながら，不登校傾向，引きこもり傾向，いじめ問題，体調不良，思い詰め傾向，自尊感情，不安などの自己評定尺度得点と弱いながらも一貫した傾向の相関が得られている。これらを総合すると，ある程度の妥当性があると考えられよう。これまで，うつは内在化問題であり，外側から捉えるのは難しいと考えられがちであった。これに対して，ある程度の信頼性妥当性を備えた教師評定による測定が可能なのではないかという観点について確認できたものと言えよう。

研究３

児童・生徒にとってもっとも大きく身近にある内在化・外在化問題行動のリスク要因および保護要因として，本年度は在席する学級でのポジティブな相互作用の程度を測定する尺度を作成した（α=.73-.93）。学級でのポジティブな相互作用が，どのようにうつや不安に影響するかを713名の中学１年生生徒を対象として，time１（4月），time2（5月）,time3（7月）に上記尺度とともに，Kiss-18,SLST,自尊感情尺度，DSRS，STAI-Yを実施し，前のtime測定から後のtime測定結果を重回帰分析で予測した。男子においては，time1のうつ得点（β=.57**）とtime2の１つの下位尺度得点（β=-.28**）が，time3のうつ得点を予測した（R^2=.53)。また,time1の不安得点（β=.57**），１つの下位尺度得点（β=-.23**），time2の１つの下位尺度（β=-.40**）が，time3の不安得点を予測した（R^2=.50）。女子においては，time1の１つの下位尺度得点（β=-23*），time２の１つの下位尺度得点（β=-.27**）とSLSTの学校不適応得点（β=.61**）がtime3のうつを予測した(R^2=.71)。また，time１の不安得点（β=.49**），time2の２つの下位尺度得点（それぞれβ=-.33**,.23**）がtime3の不安得点を予測した(R^2=.66)。

学級でのポジティブな相互作用を促進させることが，保護要因を高めることが実証された。外在化問題行動に関する分析は今後の課題とされた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

１．藤生英行　子どものストレス・コーピング--いま、何が問題か（特集 子どものストレス・コーピング）　児童心理，査読なし，64/17，2010，1409-1418

〔学会発表〕（計 10 件）

１．吉原寛・藤生英行　高校生の友人グループ状態尺度の開発と性差の検討　日本カウンセリング学会第４３回大会発表論文集，査読なし，2010,9 月 4 日，　p.113，文教大学

２．Hiroshi Yoshihara, Hideyuki Fujiu & Yoshiki Tominaga　The Contribution of Pre-High School Factors to Maladjustment of High-School Students in Japan　Book of Abstract 31st World Conference on Stress and Anxiety Research，査読有，　アイルランド国（ゴールウェイ），2010，8 月 5 日 p. 196

３．Masako Fujiu & Hideyuki Fujiu Development of Positive Interaction Scale for Classmate (1): Scale Development, Reliability, and Varidity Book of Abstract 31st World Conference on Stress and Anxiety Research，査読有，　アイルランド国（ゴールウェイ），2010，8 月 5 日 p. 163

４．Hideyuki Fujiu & Masako Fujiu Development of Positive Interaction Scale for Classmate (2): Its Influence on later Depression and Anxiety Book of Abstract 31st World Conference on Stress and Anxiety Research，査読有，　アイルランド国（ゴールウェイ），2010，8 月 5 日 p.162

５．藤生英行　2009　中学生用うつ教師評定尺度の作成　日本教育心理学会第５１回総会,査読なし，2009,9 月 22 日　静岡大学

６．吉原寛・藤生英行・富永良喜　2009　高校入学前のストレス要因と入学後の問題行動傾向との関連　日本教育心理学会第５１回総会，査読なし，2009,９月 22 日　静岡大学

７．藤江玲子・藤生英行　2009　高校生のドロップアウトと不適応傾向に関連する要因の研究（１）　日本教育心理学会第５１回総会,査読なし，2009，9 月 21 日　静岡大学

８．藤生雅子・藤生英行　2009　学級 Social Ease 尺度短縮版の作成　日本教育心理学会第５１回総会，査読なし，2009，9 月 21 日　静岡大学

９．Hiroshi Yoshihara and Hideyuki Fujiu 2009 Gender differences in friendship and stress in Japan the XIV European Conference on Developmental Psychology, 査読有，リトアニア共和国（ビリヌス）,2009,8 月 19 日.

１０．藤生英行　2008　中学生における外在化・内在化問題行動の関係　日本教育心理学会第５０回総会，査読なし，2008,10 月 13 日　東京学芸大学

６．研究組織
(1)研究代表者
藤生　英行（FUJIU HIDEYUKI）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：４０２５１００３